
目覚まし時計と自分。

雷雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目覚まし時計と自分。

【著者名】

ZZマーク

N4369P

【作者名】

雷雲

【あらすじ】

俺の思い出のヒトカケラ。

俺は深夜、目覚まし時計と暗闇と言ひつ地獄の中で戦つのだつた……

俺はある音で田を覚ました。今もその音はこの家の鳴り響いている。

その音は眠れなくなるほどひたむかべ、そして耳をつんざく。

田覚まし時計だ。

辺りは真っ暗で何も見えない。自分の姿すらまともに見えていない。深夜だろうか。

俺はベッドから転げ落ちた。頭を打つてしまつたので後頭部が痛い。

「昨日、部屋を片付けといてよかつた……」

田覚まし時計の音は部屋の向こうから聞こえてくる。

誰だ田覚まし時計つけたの。ぶんなぐるべ。何で俺が暗闇と言つ名の地獄を探検しなきやならないんだよ。

この時は結構調子に乗っていました。

……田覚まし時計をつけたのが親ではない事を願つ。この時に親に対する恐怖を思い出しました。

ふりふりとい、俺は四つん這いになつて手探りで部屋のドアを探す。

一瞬、何かに頭を打ちつけた。俺は打ちつけた場所に手を振つて

みる。

ガンツ！！

結構手が痛かつたがこの丸み、ドアノブだ。

俺は「扉を開けてもゾンビは出ない」と二回言つてドアを開けた。
(この時、9時にバイオハザードを見ました)

ドアの向こうにゾンビは居なかつた。(当たり前)

いびきが聞こえる。父親だらつか。

たしかにいびきをかいていたら体がヤバいとか番組でやつていたよ
うな……

俺はあのつづれくよりな音が左から聞こえるので、壁に頭を打ち
つけながらどこかの部屋へと入つた。

直感的、またほつろ覚えでここには母親とまだ幼い妹が寝ている部
屋だ。

つて、母親と妹。よくこの音で起きないな。疲れてたのか?

俺はまた四つん這いで手探りで田舎まし時計を探す。

その時、手が誰かに当たつた。

これは……第一人か。ここからマザコン？

「グ〜ガ〜グ〜ガ〜」

あれ、いびきかけてたのって……

... オトウトツ！？

まあ、いいか。（いいわけない）

俺はまた手探りで目覚まし時計を探す。

卷之三

あ、妹泣いた。ギャーとジココココでギャココココリか。
んな都合よく会わむか）（そ

耳痛い。耳痛い。鼓膜破れる。早く帰りたい（ どこへ）

俺は「全然うるさくない」と言い続けながら目覚まし時計を探した。（自分でうるさくしてるとジャマイカ）

つてか母親これでも起きないのかよ。どんな聴覚なんだ。（全
くだ）

俺は仰向けになり手足を動かした。その時、何か四角い物が一回足に当たった。（一回当たつただけで形を判別できるとは……）（いつ、やれる！ 何が）

俺はヘッドスライディングでそこへと向かった。（やる意味あるか？）

偶然腹にその皿覚まし時計が当たつたらしく。（痛そう……）

一つの音が止んだ。そして妹も泣きやみ、眠り始める。（普通に考えたら凄いような気がしてならない。）

俺は何とか自室に戻り、俺の意識はブラックアウトした。

(後書き)

これと似たような作品であるジコココココー...と24歳の男とは無関係です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4369p/>

目覚まし時計と自分。

2010年12月12日00時23分発行